

「向学心に燃えるベトナムの若者」～ 生産性新聞 寄稿 ～

2011年4月14日

公益財団法人日本生産性本部の「生産性新聞」2010年7月25日(月)に掲載されました。ご興味のある方は、ぜひご覧ください。

大喜多 富美郎

カルチャー寄稿

オフィス オークタ 代表  
経営コンサルタント  
**大喜多 富美郎**

何年前か前から、日本企業の海外直接投資に関して、「チャイナ・プラス・ウィン」という言葉が使われ始めた。そのプラス・ウィン候補の一番手の一つとして名前が挙がっているのが、ベトナムである。

そのベトナムのホーチミンにある私立大学で、昨年「日本企業文化」という講座を約3カ月にわたって担当する機会を得た。私はビジネスでは何度もベトナムに行っており、ベトナムの企業家や政府関係者との折衝も行ってきた。しかし、ベトナム人の大勢の若者、それも社会に出る前の大学生たちとの日常的なお付き合いは、非常に新鮮かつ楽しい体験であった。講義の目的は、ベトナムの優秀な大学生が日本に興味を持ち、日系企業に就職して力を発揮してもらうために、日本企業の考え方や人材育成などを理解してもらうというものである。

講義は二つの大学で1クラスずつ、それぞれ60〜80人を対象に行ったが、約80%は日本語を専攻している学生で、残りが工学部など他学部からであった。ベトナムでは日本語習得熱が盛んである。英語やフランス語とならんで日本語も初等教育段階から履修可能な学校が多くあるようで、日本語は人気の高い外国語である。

また、勉強している人たちの日本語能力も高い人が多い。大学生は実践不足なので、ヒアリングや敬語を使う場面では混乱することもあるが、じっくり話し合ったり、メールの交換をしていると、かなり高い能力を実感できる。

今回、日本企業文化講座に『日本のところ』という副題をつけた。『ところ』などという日本人でも分かりづらいものをとりあげたが、この日本企業の強みについて、イメージだけでなくみ取ってもらいたいという、ある意味で私にとっても挑戦であった。

講義は、前半の一般論としての学習と、後半の事例研究からそれぞれの学生に考えてもらうという二本立てで構成した。特に事例の部分では、現地日系企業の視察や日本人の社長に教室で話してもらうなど、学生たちに新しい体験をさせることができた。

また、現地日系企業のベトナム人幹部社員数人によるパネルディスカッションを行ったが、ベトナム人がベトナム語で自分の体験や考え方を語るといのがわかりやすかったようで、日頃は少し遠慮がちの学生たちが、熱心に質問をし、予定時間を1時間オーバーしても終わらない状態だった。

このようにいろいろな角度から情報を与え、学生たちが自分で考えさせることに重点をおいて講義を進めた。講義の最終日に学生の代表たちに日本の企業文化について発表してもらったが、「日本のものづくりは人づくりから始まる。ものづくりのころは、わたしたちのなかにもあります」とまとめていた。正直言ってすごく感動した。

私が多くの日本の方々に理解してもらいたいのは、日本の良いところを学びたいと思っているベトナムの若者がたくさんいるということである。彼らは非常に勉強熱心で、素直で向学心に燃えている。講義の期間中、冷房のない暑い教室の中で居眠りをする学生は3カ月間、1人もいなかった。彼らは、将来日本とベトナムの架け橋だけでなく、新しいアジアの成長の礎になりうると思う。ベトナムの若者たちを見てみると、われわれが忘れてきているいろいろなものが見えてくる。

幸いなことに、今年も同じ大学で講義をする機会を与えてもらえる。少しでも日本を理解してくれるベトナムの若者を増やして、21世紀の日本の友人が一人でも多くできるように、自分も楽しみながら頑張るつもりである。